

お染 (道行浮埒鴟)

へ今も昔は瓦町 名代娘のただ一人 へ遅れ道なる久松も まだ咲きかかる室の梅 へ蕾の花の振袖も うちを忍んでよう／＼と ここで互いの約束は 心もほんに隅田川 へ人目堤の川岸を たどり／＼て来たりける 食う殿建立

へ申しお染さま やつぱりあなたは山家屋へ

お帰りなされて下さりませ

へわが手枕に梅が香の まだ床なれぬ鶯も 子飼いのうちから御恩を受け 大事の／＼お主様 勿体ながら家来の身 へお染はじつと顔を見て アレまたあんな無理言うて そんなそのような言い訳を へそれよりわしがいやならば 一人未来へ行つて見や 男心はそうしたものか へ小さい時から生なかに 手習いまでも一つ所 何やら草紙へ書いたのを そなたに見せて問うたれば 恋という字と云うたのを 結び始めの殿御じゃと 思っているにその様な へ恨みつらみも何からと 袖に縫いて涙ぐむ 娘心ぞかわゆらし

へヤ 誰やら向こうへ サしばし木陰へ

へ朝湖が筆を写し絵に 真似て三升の彩色も 三筋は足らぬ猿曳が へ得意廻りの口祝い 宿の出がけにやかか衆とさしで ぐつと熱燗ひつかけたえ へ顔は太夫と花もみじ へまさるめでたや真赤いな 赤かんべ工 へべい／＼独楽じゃなつけれど くるりやくるりのら廻り へくるりと廻つて菜種の蝶よ へ流れ渡りの隅田堤 へきげん上戸の気も軽く 浮かれ拍子に來たりける

へヨオ コリヤ美しい花の様な二人連れ

ハハア聞こえた さてはこの頃噂のある ママ何であろうと

マわしが言う事 聞かつしやりませや ヤー

へここに東の町の名も 聞いて鬼門の角屋敷 瓦町とや油屋の 一人娘にお染とて へ年は二十八の細眉に 家の子飼いの久松と 忍び／＼の寢油を 親たちや夢にも白紋

へ二人は蕾の花盛り しぼりかねたる振りの袖 梅香の露の玉の緒の末は互いの吉丁寺 そこで浮き名の種油 へ意見まじりに興じける

へ春を取越すおさる万歳 めでとうここがかなでましよるか

へ猿若に御万歳とは 櫓も栄えてまします 青陽新玉の年立ち帰る 周の春 愛嬌ありけるぼつとりもの へ二八十六で諸人のひつばる色娘 へお染といつたら立つたりしよ へお猿はめでたや／＼な

へエイ／＼さりとは／＼

へかよう申す才蔵なんぞは ホホヤレ／＼ まんざらこやまつちやらこ

まんざらこじやありやせまい へ百万年の寿と へ祝いにいおうて猿曳
は里ある方へと走り行く

へハテ知らぬ人とはいいながら 親切なるあの意見

さりながらとても死なねばならぬ二人が身の上

ちつとも早うお染様

へ顔見合わせて目は涙 へ今は二人もつかの間に 弥陀のみ国に隅田
川 へ蓮のうてなのあら世帯 いざ言問わん都鳥 へあしと橋場の明け
近きはや長命寺の鐘の音も へここに浮名やながすらん へここに浮
名やながすらん。